

「微光」論

はじめに

「微光」(『中央公論』明43・10)は、明治四十三年記者として七年動続した読売新聞社の退社を余儀なくされた白鳥が、文筆活動に専念する覚悟を新たにし、職業作家に転じた直後に発表した注目すべき作品である。その評価をめぐっては、多くの賛辞を集めた発表時の論評以来、これまでに自然主義作家白鳥の成熟というタームに沿って定式化されて来た感がある。たとえば、猪野謙二^正氏の『「微光」』(明治四十三年十月)は『何処へ』と並んでそれとはまさに対蹠的な位置にある白鳥の代表作である。ここにはもはや『何処へ』や『徒勞』にみられた、いわゆる『弱者の反抗』も観念の異常な戦慄もない。作者の不安や苦悶をじかにうち出しているようなところはない。うらぶれた愛欲の世界にうごめく一人の女をとりあげ、淡淡とした無感動の筆であてもなく男から男へと漂う一個の自然主義的な女性像を描きあげている。」と言う評言は、その作品理解・位置づけにおいて、代表的な見解と言ってよい。しかし、私見によると「自

然主義的な女性像」と要約する紋切り型の指摘は、お国という女の個性、その内実を理解したことになるのであろうか。さらに、「微光」ははたして「何処へ」と「対蹠的な位置」にある作品なのであろうか、という疑問も拭いきれないのである。

近年精緻な資料検証によって、事実尊重の小説を標榜した自然主義文学陣営の創作態度に対して、白鳥が根本的な批判者でもあり得たという理解に立ち、その実践の具体相の解明を作品読解によって遂行しようとした山本芳明氏^正の出色の論考が出されるに至った。「微光」はようやく年来の固定した枠組みから解放され、その独自の世界を探究すべき時に来たと言ってよい。わたしも、山本論文の趣旨に傾聴すべき見解が示されていると評価するが、なお一方で、「微光」を成立にいたらしめた内発的モチーフ、及びその胚胎過程、さらにそれらを踏まえた作品解釈において異見をいだいているので、あえて「微光」の意図と作品の関係について私見を述べたいと思う。

国語科

瓜 生 清

(平成四年九月十日受理)

(一)

すでに引き古され周知となった資料であるが、「微光」の成立について回想した「文壇的自叙伝」(『中央公論』昭13・2・7)の検討から手掛かりを得たい。

『微光』は、十月発行の秋季増刊のために書いたのだが、期日が切迫してゐたので、珍しく稲毛の海岸へ出掛けて筆を急ぐことにした。(中略)稲毛では、海気館の離れに一週間滞在したのだが、九月の中旬で、季節の動揺が、日本趣味相応の詩情をそゝつた。(中略)疲れると散歩したり玉突きをしたりして、締切までに原稿紙百二十枚ばかり書いた。時間があつたらまだ書き続けられたのだが、期限が来て催促されたから直ちに完結して、帰京した。

「文壇的自叙伝」の第四章である。後年の回想であるため、先ず内容に関して信憑性の問題を避けて通れまい。脱稿までの経過、要した時間等については、この自作解説以外裏づけになる資料に乏しい。稲毛の海気館に向いたのが「九月の中旬」であつたという回想は、同地に滞在中構想され、「微光」を脱稿の上、帰京後に完成した小説「盲目」(『早稲田文学』明43・10)に、稲毛滞在期間に関して「十三日か十四日かと思はれる月が松林の間にかゝつてゐる。」と述べている表現と合致している。その他、紙数について「百二十枚ばかり」と述べている記憶は正確であり、初出「中央公論」の本文は、四百字詰で概算すると百二十五枚にあたる。以上のことを総合すると、「文壇的自叙伝」が伝える内容上に問題は少ないと判断して差し支えなからう。

さて、前掲の引用文において興味深いのは、常々執筆難をかこち続け

た白鳥にしては珍しく、感興に乗った創作意欲と、「一週間」程という異例な短時日において「微光」を完成させた事実である。この例外的な執筆速度と、これに関連して白鳥が「事実と想像」(『中央文学』大6・4)等多くの資料で、再三再四実録小説、あるいは自己描叙と見做す作品理解に對して、その誤解であることを躍起となつて正そうとしていたことも既に周知であるが、「文壇的自叙伝」第四章には「微光」にしても忠実なる事実の描写ではない。」と強く言明していることが、注目されるのである。事柄の経過としての事実関係と小説を癒着させる論議に異議申立てをしている白鳥の考えに従うと、『微光』はモデルや事実関係に拘束されず、想像力の発動を充分に利かせた作品ということに帰着する。つまり、感興に乗り短期間に完成された経緯と、事実の直叙を主眼としたものではないという趣旨は、それを合体させると、白鳥が想像力を駆使して虚構の世界で探究しようとした強い内発的なモチーフの存在を示唆していることになる。

では、一体「微光」執筆にいたる白鳥の内部には、いかなる思念が去来していたのか。読売新聞退社について「久しく我社の文芸欄に居り、靈腕を振つて読者に見え居りし正宗白鳥君は此度退社の事と為れり」と報じた記事が掲載されたのは、明治四十三年七月三日のことである。この重大な節目になった出来事は、エッセイ「追憶」(『読売新聞』明43・10・5)に述べている通り、「在社中のいろ／＼の事を取り留めもなく思ひ出」させ、往事の追想、過去への遡及意識を濃厚にさせた。引き続いてこのような意識を青春の回顧へより限定していったのが、妹正子の死との遭遇であつた。

前掲の小説「盲目」は、稲毛海気館に滞在した客の徒然の備忘録を紹介する体裁をとっているが、かなり虚構化の弱いエッセイ風の作品であ

る。これによると、白鳥は稲毛へ発とうとした丁度その時、郷里からの電報によって妹の死を知る。父浦二の長女正子が死んだのは、明治四十三年九月九日のことである。享年十八歳。以下、年齢は数えて記す。

「盲目」には「自分とよく似てゐた妹」は、「今歳確か十八だが自分も十八の時に死にかけた。」と書かれてゐる。明治二十九年二月十八歳で上京、病を得て夏帰省、重患のため二箇月死線をさまよつた後、再度上京を果たした白鳥と奇しくも同年齢で逝つた正子の死が、死生観をめぐつて自問自答を続けてきた白鳥に衝撃を与えたであろうことは、想像に難くない。妹の死を悼みながらも、むしろ純潔のままに生を終えた方が、幸福ではなかつたかとさえ思う落莫とした心境は、それにふさわしい閱歷の時間に向つて「心は現在を忘れて、頻りに過去を呼び起した。」という回帰を行う。そして、前述の病臥体験から、十二、三歳の時の淫らな女への嫌惡を覚える体験等、現在と過去との往還を繰り返しながら、冒頭の虚無的な人生観想へと戻り、円環を閉じる構成になっている。

勿論わたしは、「盲目」の内容を即「微光」読解のストレートな補助線であると強調したい訳ではない。両者の関係は、内容上一体の関係にあると考えるべきではあるまい。「微かな光でもとめたつもりであつた」(「文壇生活二十年」・「婦女界」昭7・10)と述べている自作解説もあるように、お国が恋愛への渴望感と男の現実的な思惑との齟齬に苛立ちながらも、終始恋を信仰とする激しい観念への自己同一化を求めてやまない「微光」の世界に対して、「盲目」はそれを反転させた陰画の関係にあると考へたいのである。つまり、懷疑と信仰に引き裂かれた二律背反的な精神の矛盾構造を生きたるを得なかつた白鳥は、過去への追想の意識に胚胎した両作品において、お国を通して自己の青春のロマンチズムを追究しているとするならば、「盲目」では現在のネガティブな心境に規制

された過去の意味づけをおこない、それぞれ自己の内面に正確に対応させているのである。

「盲目」の過去遡及についていまだ少し敷衍しておく、十八歳の時の病床生活、十二、三歳の頃、潔癖な性情ゆえ淫らな故郷の風儀を嫌惡する内容は、後年の小説「一念」(「早稲田文学」大4・4)「最初の女」(「中央公論」同上)との類似性をすぐに思い浮かべせるように、白鳥が「微光」執筆時、万事守旧的な意識が支配する野卑な故郷を忌避し、未来への自恃を追求するため東京への夢想を際限なく拡大させていた熱烈な出郷願望の時代を、強く意識内に措定していた事を裏側から説明していることになるのだ。上記のような観点に立つと、故郷を拒絶し勇躍して上京したお国の出郷物語という内容は、興味深い検討課題と言わなければならぬ。

(二)

「微光」を淪落の世界に沈んでゆくお国の頹廢物語として読む理解は、依然根強い。確かにお国の前半生の男性遍歴を整理し略述すると、このような理解の仕方は一見妥当な見解に思える。お国は、十六の春故郷栃木から上京し、同じ年の秋隣家の食客鈴木甘言に欺かれて、姉の家を奔り湯島天神下に鈴木と貧しい所帯を持つ。翌十七の夏、不忍池で花火のあった夜、かねてから心を寄せていた帝国大学生河津と知り合い、以後池の端・湯島天神境内等で密会を続け、その関係は三年後の二十の七月現在まで続いている。この間、十七、八の頃鈴木との生活が窮迫した為、余儀なく「厭な男の妾」(一)になって、一子お安を産むが、その後一時しのぎと思ひ「神田の通ひ番頭」(十)「品川の質屋の隠居」

(九)等の世話をつけ、二十の五月以降周旋屋「よしや」の仲介で、朝川の囲われ者になっている。

上記の通り、お国が糊口のためという口実のもとに、次々と男性の間を流転して行く結果になっている経過を見る限り、先述の猪野謙二氏に代表される見解は妥当性を持っているようである。しかし、結果としての男性遍歴に固着した考え方は、お国が「恋しくもない男と、何で一生の縁を結ばれようぞと、不断の信仰を力強く述べ」(十五)、恋を至上とする観念への自己同一化の希求と、結局「一時の玩弄物にする」(十二)男性側の利己的な思考との断層にいらだち、その挙げ句恋への渴望と男性不信との解決策として心中を美化しなければならなくなる「遣る瀬ない思ひ」(十一)に「身悶えする」(同上)特異な個性の内実を、完全に読み落としていることになっている。

しかも、上記の事に加えて、「微光」の空間は「河津にしても鈴木にしても、親姉妹にしても、よしやの関所を経てのみ、お国と消息を通ずる」(十三)という表現がある通り、妾の境遇にあるお国の生活と、故郷(母)・姉・お安等の血縁及び男性側とが、明確に二分される構造で作り上げられている。これは、一応世間の忌諱に触れる日陰の女という境遇が、血縁等を遠景に遠ざけさせているとも言えるが、寧ろ「居所も知らせない」(一)方針を貫こうとしたのは、全くお国の自由意思であり、お国が「自分に関係の深い世間」(十三)では実現しがたい恋との一体化に生きようとする姿を鮮明にする方法と考えるべきであろう。

お国という女の人間像を明確にするためには、ロマンチックな世界を夢想する潜在的な資質に目醒め、それが顕在化していく時間を、第四章に見える前半生についての記述をもとに復元してみなければならぬ。

「十六の春」(三)上京の折「お前は東京へ行つて磨き上げたら、何処

へ出しても恥しくない女になるよ。」(四)とおだてた叔母の言葉は、根拠のない全くの空世辞ではあるまい。辛酸を嘗めたにもかかわらず、上京後お国は一度も帰郷せず、東京へ固着し続けた事が示唆しているように、同族の煩瑣な束縛ともものうく停滞している家郷の閉鎖性にあきたらず、生来の「容色」(十四)よしという美貌にふさわしい矜持に動かされたとお国は、未来への夢想到に牽引され「勇ましく東京へ行つ」(三)た出郷者であったのである。その後、無頼のような鈴木甘言にまんまと乗せられたお国の行動は、田舎育ちの無思慮な少女がたどる陳腐な段取りであるかようである。しかし、出奔という無謀な行動に駆り立てた要因は、自恃意識の強いお国の現状にあったはずである。お国の脱出衝動は、「否な御亭主に何時までも連れ添つてゝ恋もしない」(六)凡庸な姉への悔蔑と、生活にまみれ日銭を数えて暮らしている惨めな現状に、自分も埋没されかねない苛立たしさから生まれてきたのである。鈴木誘惑は、上京後の予期に反した生活に不本意な思いを募らせていたお国の屈託につけ込んだため、首尾よく成功したのである。

密かにお国の美貌を利用しようと企む鈴木は、早速「恋文はかう書くものだと幾度も稽古させ」(四)、「恋する時と悲しみと何れか永き何れか短かき」(同上)という藤村の『若菜集』(春陽堂、明30・8)所収の詩篇「おきく」の一節を読み聞かせたりする。因みに、『若菜集』においては、「おきく」の引用部の表記は全て平仮名書きである。自恃に支えられたお国の夢想は、次第に受動的な「稽古」の時期を経て、自発的に「恋しき御許へ」と誰れに宛てるともなく書い(四)てみたりする覚醒に到達し、鈴木「感情教育」は、目算通りお国を愛慕させることに成功する。元来、お国の出奔の動機は、現状に対する不満から生まれたものであり、恋の対象として鈴木を選択した訳ではあるまい。であるから、酔っ

ては猥雑な話に興じ、壮語によって生活無能力者であることを隠蔽している鈴木の実態が暴露されてゆくにつれ、姉の家に寄宿していた時と同様に、鈴木との同棲に不満を覚え始めるのである。要するに、鈴木はお国に本来あった強い夢想性を、恋情の自覚に向けて人為的に点火してやった人間に過ぎないのである。鈴木が「感情教育」の教材に使用した詩篇「おきく」に登場する〈道〉〈国〉のために命を捨てた男達は、当然無粋な生活無能力者である鈴木を際立たせることになり、お国は詩篇「おきく」の一途な恋に生きる女にふさわしい男性を求めて遍歴を開始したのである。そして、移り気な男のために女の恋が悲しみを結果するという詩篇「おきく」の内容は、以後お国の青春を貫く基調的な男女の関係として重層していくのである。

(三)

恋という観念が胚胎し明確化していく過程と、帝国大学生河津との出会いが殆んど同時であった事実は興味深い。お国が河津を強く意識し始める時期は、天神下に貧しい所帯を持った十六の秋からまもない頃のことである。その時、「天神下の前の家に二階借りして」(五) 最高学府に通う「河津の制服姿」(同上) は、お国が育んでいた理想的な恋人に合致する青年として目に留まるのである。その恋の性格は、「学士」(同上) となり恋の情熱が冷め始めた河津が、二人の過去を既に完結した物語として回想風に綴った第二章の手紙に窺うことができる。

本郷座の側にて一時間余も待ちあぐみて、御身も何かの障礙にて家出もならぬことならんと諦め、失望して帰宿せんとする刹那に、御身の幽かなる声を耳に致し候。幽かなれど、その声は小生の一生に

耳朶を去らざる声にして、今孤燈の下鮮やかに思ひ出され万感交々至り、一滴の涙なきを得ず候。呀え渡る月光に浴して、湯島天神の境内まで、互ひに語らふ言葉もなく歩みて、其処にて一生の別れを告げ候ひしは、御身も尚お忘れならぬ事と存じ候。大宮の雪、湯島の月、忘れ難き記憶は爾後屢々小生を悩ましもし慰めも致し候。

この回想は、一生の別れという重大な局面に対して、自作自演的な演出が、いかに恰好なシチュエーションにおいて行われているかが窺え、大変に興味深い。二人の恋に表われている演技性を検討するためには、その前に引用文及びそれに接続する箇所にある「本郷座」で上演された「己が罪」との関連から言及して行く必要がある。

菊池幽芳原作『己が罪』(春陽堂、前篇・明33・8、中篇・明34・1、後篇・明34・7) が、明治三十八年十一月、本郷座において上演される。「微光」第三章に見える「房州海岸の場」は、「小説『己が罪』中の絶唱で、劇『己が罪』中の絶唱で、新派演劇中金色夜叉の熱海々岸と共に最も劇化されたもの」^{注6}で、この人口に膾炙した舞台面が、お国の自己劇化に使われているのである。つまり、外出したまま戻って来ない河津を待ちあぐねたお国についての「目を閉じた……」という表記から、劇中への同化が始まり、ヒロイン箕輪環役の河合武雄と自分の姿を重ねてゆく。しかし、劇と現実の関係は、漁師作兵衛の下に里子に出されていた玉太郎の場合、環を実の母ではないかと思ひ慕い寄って来るのに反して、中野の養家に預けている実子お安は、お国を他人のように拒み「声を張り上げて泣き出した……。」という齟齬に直面し、劇の世界との一時的同化は終わっているのである。

それでは、お国の恋愛場面において、一生の別れを告げる「湯島天神の境内」の件は、悲恋を演出し現実化する手立てとして、自己移入する

に恰好なシチュエーションであると考えなければならないか。泉鏡花原作・柳川春葉脚色の新派の上演劇「婦系図」が、喜多村縁郎扮するお鳶、早瀬主税役は伊井蓉峯によって新富座で上演されたのが、明治四十一年十月のことである。そして、元来原作には無く新たに脚色された、早瀬とお鳶が清く別れる第三幕目「湯島天神境内」の場面が、お鳶役の喜多村の好演によって反響を呼び、以後鏡花自身もお鳶の物語としての原作の可能性を「湯島の境内」(「新小説」大3・10)という一幕の戯曲の発表によって認め、以降上述の一場がみせどころとなつてしばしば上演されていったことは、周知のことである。つまり、お国は「婦系図」の劇中人物お鳶に、「世間の義理に迫られて、別れともないのに別れ」(十一)なければならぬ悲恋の女として自分を重ね、再演していたと考えられるのである。

湯島境内の別離の場面が、「冴え渡る月光」の下に進行している事も見逃せない。白鳥の自注が、「微光」という題名について「微かな光でも求めたつもりであつた」と述べ、「光」の象徴性に言及していたことも関連するが、作中しきりに使われている「月光」と「日光」が、それぞれ現実から逸脱させる甘美な恋の場面と、それとは逆に刺きだしの現実面とを対照させる為の重要なイメージとして描かれているようである。例えば、冒頭「土用太郎——三日降り続いた涼しい雨も上つて、今日は朝から日は暑く照つた。」(一)という書き出しは、お国が先の確かでない生活の中で、日々の無為に屈託している現状を容赦なく自覚させるように機能している。以降、「照り付けてゐる真昼の強い光」(六)は、暑気が募る毎に、お国の夢想を浸食し続ける。一方、母の病氣見舞いに河津を同行させた宿において、お国は「縁側に差し込んで来た月影」(五)を浴びながら、夢見るような「哀れつばい話」(同上)を河津にせがむ件や、

不忍池に花火があつた夜、河津と知り合うことになつた思い出深い場所に関係して、「臘月夜に寄りつ離れつ観月橋(稿者注 不忍池畔から中島に懸けられている橋の名)を渡つた。」(十一)という箇所等、絶えず月の光の下に立つ男女の姿という共通点がある。それは、「物語の中を小迷つてゐる」(五)気であるお国が、恋の世界を人為的に現前化させるための舞台装置なのである。そして、二人を結びつけるきっかけになり「月光」「日光」の光のイメージと類似関係にある「花火」は、刹那に生命を燃焼させる恋との一体化を求める彷徨の果て、現実によって無化されない強烈な「火花」(十一)のような恋を求めて疾走して行く結末部と呼応していると言えるのである。

(四)

ところで、朝川は第九章に入るまで直接行動主体として登場することはない。朝川イコール白鳥という固定した理解に立ち、白鳥が自己描叙を意図していたと考えるならば、小説の過半を超えて、漸く描写の本体が登場するという不可解な書き方に、合理的な説明を与えることが出来ない。朝川は自分ではないと再三言明している白鳥の証言は、その意味において当然であり、モデル小説的な享受、近松秋江とのスキャンダラスな好奇心からとりざたされた実録的な読みを、完全に排除して考えていかなければならないことさえ示唆している。

朝川はお国に情愛を感じ始めていながら、旦那と囲われている女という関係の枠組みを変えようとせず、その素振りは努めて素っ気ない態度をとり続ける。ここには、愛・恋等の観念の虚妄性に十分に自覚的な男であるがゆえに、関係の過剰さに対する本能的な防衛反応が見られると

いってよいであろう。朝川は、お国が観念と現実の落差にいらだち、やる瀬ない思いに「身悶えする様」を知らぬげに挑発し、「手痛い所を針でつづいて」(十一)内部を開示してゆく役割を持たされていると考えられる。

夜道、朝川を家まで送ってゆく道すがら「世を狭められた落人」(九)のように思い過すお国の道行は、人目を忍ぶ河津との場合と類似しているが、にべもなく冷淡に別れる朝川に対して「何であゝ恋を解しない人だらう」(同上)と落胆するお国を描いて正反對になっている。そのため、お国の言動は朝川との溝を埋めようとして、従来にも増して自己劇化的な演技性を強めていくのである。

朝川が直接登場する第九章を境に、小説を前半部と後半部に分けてみる。前半部は、鈴木の下から姿をくらし、妾の生活を送りながら河津との逢瀬を重ねて来た経過を呈示しており、第九章から結末までの朝川との交渉場面との比較によって、読者は非同調的な朝川の態度に対して、その溝を埋めようとして演技性を強めていくお国の青春の回想が、いかに彼女好みの自叙伝として「虚偽と真実との差別のつかぬほどに、事実が潤色されてゐる」(十二)かを、明白に炙り出してゆくように対照されていると解釈できるのである。

例えば、第九章において、鈴木がよしやを通してお国に復縁の手紙を送りつけて来る。朝川は気まずい思いを隠しながら、鈴木との関係にさり気なく探りを入れた時、お国はその反論として、十六の「大晦日前」の日、着物を質入れして吉原まで迎えにいった苦労話を語る。しかし、前述の第四章によると、鈴木と同棲を始めたのは十六の秋であり、その時の鈴木はお国の歓心を買おうとして、無理算段しては女の喜びそうな香水・白粉などを買い与え「御機嫌を取つてゐた」のが実態であった。

当然お国の機嫌をそこねさせかねない吉原での遊蕩の記述は、第四章にはない。そうすると、お国の回想は、着物を質入れして急場をしのがねばならなかった困窮の生活を踏まえ、それを無頼の男に苦しめられる薄幸な少女の物語に粉飾されていると言える。

その他、第十一章の「一生に又とない見せ場」としてお国が語る「池の端」での別離の場面の物語も、虚構化が著しい。それは、河津と懇になるきっかけを作った不忍池で花火があった夜の記憶を踏まえ、それに「以前鈴木の目を忍んで、上野近所で出会った」(五)事や、郷里栃木へ河津と同行し、途中「思川」(二)を見て行く汽車の旅が、自在に借用されている。そして、お国の口癖になっている恋愛信仰の美化が行きついた果ての「心中」については、寿町の借家で知りあった勝太という少年と交わした「戯れの言葉」(八)を使いながら、実際とは逆に男の方が女に心中を懇願する理想的な演技者へ変容させられているのである。

ところで、お国が朝川に語り聞かせる回想について「自分の心の中でも最早虚偽と真実との差別のつかぬほどに、事実が潤色されてゐる。」と挿入された語り手の説明は、お国の履歴について略述した小説の前半部と、朝川との交渉を中心とする後半部を比較して見れば明白な事であり、本来不要と言っても過言ではない。敢えて作中に介入する挿入的文面を書かした理由は、恋に魅入られたお国が際限なく自己劇化を進行させる特異なあり様を明示する以外のなものでもない。そして、語り手と朝川を、お国の物語の自叙伝の虚構性を正確に判別し得る人間であるか否かという点で明確に峻別する書き方の導入は、「微光」に先行する一連の作品について、近松秋江との下世話な関係を暴露した楽屋落ち小説として興味津々と興じていた好奇な読者の目を、「微光」において再現される事態を拒否したい意識が作用していたと考えられるであろう。

さて、心中を美化する自己劇化の到達点に達したお国に「もう少し今のやうにして居れ」(十六)となだめ、煮えきらない現状維持的な態度に終始する朝川とお国の意向とは完全にすれちがっており、両者の関係は終局に向かう。その時、事態の流動化に期待を繋ぐお国は、ロマンチックな世界を成就させる真の相手を発見した「火花」の夜と同様に、観念への一体化を色褪せさせないほしい「火花」のような関係を求めて、よしやへ車を疾走させて行くのである。

(五)

ところで山本論文は、「微光」のお国と男性側との間に顕在化してゆく「ディスコミュニケーション^注」を、「何処へ」の菅沼健次と他の登場人物の関係にあてはめ、「微光」において人間相互の不毛な関係性という一貫する追究課題が、いかに異なった表現に変化しているかについて言及している。しかし、目下のわたしの関心を率直に言えば、菅沼健次と一脈相通じるロマンチックな主人公に作者の感情移入がたやすく可能となり、しかも生彩ある人間像の表出を実現し得た理由も無視すべきではあるまいと思う。

天性の美貌に恵まれ、未来への強い自恃を持って勇躍して旅立ったお国の上京譚として「微光」を考えると、「二家族」(『早稲田文学』明41・9・42・5)の激しい出郷願望、明治二十九年の夏、辛くも再起して上京の旅に出る前掲の小説「一念」との共通性は明白である。恋という観念に魅入られ、それを現実的な関係に措定出来ないがゆえに、一層観念化させ、結局男から男へと青春をいたずらな彷徨に終わらせている主人公は、白鳥の青春が信仰という形而上的な理想志向と肉体に固執する懷疑

精神との背反に空転していった軌跡と類縁関係にあるのではないか。つまり、白鳥は淪落の世界に徐々に破滅してゆく女の半生という自然主義作家に共通する好個のテーマを使いながら、お国という女を通して激烈なロマンチズムの時代の終焉を描いたと考えるのである。「微光」あたりから私の青年期は終わつたやうなものだ。」「旧作追懐」、『文学修行』所収、三笠書房、昭17・11・20)と語っている解説や、読売新聞退社直後の代表的仕事として「微光」と「徒勞」を掲げ、前者がかすかな光明を追求した作品で、後者は人生の徒勞を象徴し、自己の青春を二面から対象化した創作であると併記している資料(前出「文壇生活二十年」)の存在も、「微光」が虚構の世界で自分の青春のあり様を追究しようとした意図の下に成立していると解釈できる証拠材料になるであろう。

注

- 1 猪野謙二「白鳥と泡鳴」(『明治の作家』所収、岩波書店 昭41・11・30) 376-377頁。
- 2 山本芳明「白鳥の軌跡―『空想ニ煩悶』する青年から『自然主義』作家へ 正宗白鳥ノート2」(『学習院大学文学部研究年報』35、平元・3)。
- 3 「よみうり抄」(『読売新聞』明43・9・3)は、「微光」「盲目」の執筆に関して「正宗白鳥氏は『中央公論』及び『早稲田文学』に各百五十枚位の短篇を寄稿する由にて目下執筆中なり」と伝えている。しかし、仮にこの伝聞通り、九月初めに既に「微光」に着手していたとしても、小説の執筆が本格化するののは、同月九日稲毛へ発ってからのことであろうと推測される。
- 4 「盲目」が「微光」の脱稿後に完成したであろうと推定できる資料として、「よみうり抄」(『読売新聞』明43・9・25)に「正宗白鳥氏は目下『早稲田文学』秋季付録号の小説『盲目』を執筆中にて多忙を極めつゝあり」と見え

る。

5 注1の山本論文227へ。

6 真多楼「東京座の『己が罪』」(帝国文学)明38・11)

7 湯島境内の場が上演に際して新たに脚色された由来については、お鳶を演じた喜多村緑郎の『婦系図』の思い出―『湯島境内の場』誕生記―(「話昭27・10」)に詳しい。

8 天神境内の別れの場面については、その反響を伝える劇評として、「(喜多村)の内縁の妻お鳶は若者上がらしく見え、早瀬内の方はさしたる事もなかったが、天神の別れはちょっと宜かった。」(伊井の早瀬主税で『婦系図』、「時事新報」明41・10・11)と報じられている。なお引用は、『明治ニュース事典』第8巻(1986・1・15)による。

9 注1の山本論文235へ。

付記 白鳥の妹正子の調査に際しては、柳青院(備前市)の妹尾美保様に御高配いただきました。深謝申し上げます。